

Title	アニー・エルノー『少女の記憶』における「わたし」
Sub Title	Rapport entre je et elle dans Mémoire de fille d'Annie Ernaux
Author	森, 千夏(Mori, Chinatsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.128, (2025. 6) ,p.88 (73)- 103 (58)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01280001-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アニー・エルノー『少女の記憶』における「わたし」

森 千夏

はじめに

アニー・エルノーが2016年に刊行した『少女の記憶』*Mémoire de fille*¹は、これまで作品の中で幾度か言及されることはあったものの、十分に語られてこなかった思春期の一時期（1958—60年）の自己に関する物語 *récit* であり、彼女の人生と作品を理解する上で、とりわけ重要な最後のパーツといわれている。

18歳になる若い娘が故郷を離れ、林間学校、高校、教師養成学校、イギリスでの様々な体験を経て、再び故郷に戻り大学へ進学する、とビルドゥイング小説風に要約することも可能だが、性、宗教、階層の大きく異なる社会集団への孤独な侵入が、成長によって不安的な少女の心身に与えた試練は、想像をはるかに絶する過酷なものだった。それは、父親の母親に対する暴力を契機に社会的恥を自覚した52年（『恥』*La honte*）と、違法人工妊娠中絶を行った63年の性的な恥（『事件』）との間にある、性と欲望をめぐる「少女の恥」の体験であり、エルノーが書くこと、厳密には、生を書くことへと向かう決定的要因になった。そして彼女の全ての作品に通底するテーマと深く関わるものでもある。本稿では、執筆する現在と体験された過去、語る自己と語られる自己の関係性を探っていく。

執筆までの時間

本作は実際の体験から55年を隔てて執筆された。懐かしく甘い思い出は一切無い。それはエルノーが頑なに想起と執筆を拒絶するも、彼女の無意識から離れない記憶である。

わたしもその少女を忘れたかった。本当に忘れるということは、つまり、もう彼女について書きたくないということ。もうこれ以上、彼女、彼女の欲望、狂気、愚かさ、傲慢さ、空腹、涸れた血について書かなければならないと考えないこと。決して出来なかった。いつも日記にある文、「Sの少女」「58年の少女」への暗示。20年来、本の計画に「58」と書き留めたまま。いつも欠けているテキスト。いつも延期。形容できない穴。(MF 1)

「少女」とは過去の自分自身を指す。まるで彼女の内奥に入るための暗号のような形で創作日記に登場するその過去は、読者にとっては勿論のこと、エルノー本人にとっても、言語化できない記憶、謎に包まれた空白だったことが分かる。

体験と執筆の長いスパンはトラウマを語る困難を示している。体験から36年後に執筆された『事件』に関して、エルノーは、中絶について書きたいと思い続けていたものの、辛い時間に再び身を投じることに恐ろしさを感じていたと述べている²。また同作中では、中絶体験から10年後に出版した『空のタンス』*Les armoires vides* (1974)の執筆に際して当時を想起することが、体験自体と比べて「ほんとうの不幸」だったと表現している (p.163)。このことは、体験からいかに長い時間が経過しようとも、記憶が作家に与える恐怖の威力に変わりが無いことを示している。

とはいえ、エルノーは55年間無言だったわけではない。手帳と19歳の時に着手した未完の小説、テキスト内外の日記の中に、様々な思索と執筆の痕跡が存在しているし、2作目『彼らの言うこと、何も言わないこと』*Ce qu'ils disent ou rien* (1977)も本作と同じ体験を扱った小説である。『場所』(1984)以降定着した独自の手法、つまり、日記や写真等の物的証拠を用いて「探求の文学」へと転成させたのが『少女の記憶』なのだ。処女小説『空のタンス』から虚構性を取り除き、『事件』でそれを取り巻く当時のフランス社会の現実を浮き彫りしたのと同様、エルノーは少女の生と性に関わる、50年代の文化、社会、価値規範にメスを入れた。

1958年の果てまで行くこと、それは年月をかけて蓄積された解釈の細分化を受け入れること。何も平準化しないことである。虚構の登場人物を作るの

ではない。かつて私だった少女を解体するのだ。(MF 56)

55年という歳月は体験と過去の自分を徹底的に解析するのに必要な時間的距離として捉えられている。実際にテキストには作者の新たな気づきや解釈の可能性が頻繁に挿入され、時勢を反映した視点、「性的同意」に関する記述もみられる³。Sapiroは77年の小説とは異なる角度から性体験を書いていると指摘している⁴。

語る時間と「わたし」⁵

深い満足感を覚えて1958年8月16日から17日のその夜を描写するのは初めてだ。これ以上現実へ接近することはできないように思われる。それは恐怖でも恥でもなかった。単に起こることに従ったにすぎず、起こることの意味が欠如している。(MF 46)

エルノーはようやく納得のいく初夜の記述を実現すると、再び次の場面の描写に進んでいく。このように作品全体を通して2つの時間——語る時間（テキスト生成）と語られる時間（過去の体験／58－60年）——が平行して流れ、語り手は（読者も）絶え間なく両方の時間を往來することになる。

『事件』では当時の日記と手帳が真実と思える言葉を探すための重要な道具であったが（p.96）、58－60年の日記は消失しているため、物的記憶の少なさが語り手がかつてないほどに不安にする。記憶の細部や出来事の順序の不確かさ（例えば「午後すれ違いざまに約束を取り付けたのは彼の方だったか、それとも彼女が自分からやって来たのだろうか。」(MF 48)）、過去の自分の内面の不明瞭さ（「彼女の頭に初夜、「愛の一夜」という考えがすでに浮かんだかどうか、私にはもはや分からない。」(MF 46)）を表す表現が多用され、以前は実行しなかった行為（「ミニテルの電話帳でそれらの名前を探してみたいと思うとき、すぐにそれは間違いだという多いが生じてくる。』『事件』 p.122）、つまり過去の関係者の所在探しに執拗に駆り立てられる（「パソコンの白いページに彼らの名字と名前をタイプした。」(MF 35)）。

語り手は、地方新聞のある金婚式の記事の写真の中に、かつて愛と肉体を捧げた男性の存在を発見する。彼の現在の姿にかつての面影を認めながらも、同時に

過去との断絶を見出す (MF 94)。それはエルノーと過去の関係性と対極をなすものといえる⁶。また、彼の一族、約40名の集合写真は、当時林間学校で子どもたちと過ごした集団生活の光景を想起させるとともに、「失望に近い不安のようなもの」も感じさせる。

まるで彼らは、彼、ゴッドファーザーの周りで、彼らが存在していなかったか、あるいは、わたしは忘れていないが、彼らが忘れてしまった時間の記憶に対抗して同盟を結び、彼らが全く知らない企てに対して団結しているかのよう。50年前に別の形で起こった狂気が続いていることで、彼らが私を非難しているという感じ。(MF 94-95)

語り手は過去の記憶を保持していること、それを執筆していることに対して、実在する彼の子孫からの無言の圧力を感じているが、それは林間学校で彼女を軽蔑と嘲笑の対象とし、集団で攻撃した、あの「1人の女性の周りに輪をつくった男たちが今にも彼女に『石を投げつけよう』としている」(MF 65) 光景を連想させるものでもある。男性を中心として構成される集団と数の力、数の暴力への鋭敏さは、彼女の過去の記憶に起因するといえるだろう。このようにトラウマ的体験は想起する過去の中にあるだけでなく、語り手の執筆する現在にも影響を及ぼしているのである。

こうして、執筆行為は過去のヒエラルキーを転覆させる場と化する。

わたしが記憶している唯一の人物であるということが—そう信じている—、わたしを魅了する。至上の権力のよう。わたしの欲望、ルーアンの通りの突拍子もない夢、老女と同じ、18歳の涸れた血の恥によって、わたしに残された、彼ら、58年の夏の他の人々に対する決定的な優位性。他のどんなものよりも、細微で取扱不能な恥の大きな記憶。この記憶は、要するに、恥の特別な贈り物。(MF 18-19)

恥感情によって忘却を免れた記憶は、語り手に自尊感情とある種の力を与えると同時に、既刊作品に見られたように、心理的負債として社会へ返報すべきものとして捉えられている。エルノーにとって「贈り物」(don) は政治行為としての

執筆と結びつくものでもある⁷。語り手はトラウマの物語とその物語を生成する物語の双方を書いており、語る時間内で展開する後者は、これまで彼女が（あるいは誰も）書かなかった出来事、事実を、書くことによって顕在化させることを意味する。Havercroftの『事件』についての指摘と合致するのだが⁸、ここには被害を受けた者が行動する者へと転換するダイナミズムが働いている。だが執筆において語り手は無傷ではない。時に反良識的な立場に身を置き(MF 96)、作家の顔を汚しかねない様々な過去の事実を公衆に晒すのだから(MF 56)。

語り手と過去の自分

『歲月』 *Les années* (2008)では各年代の作者と思しき人物の写真が活写され、集約すると読者の頭の中にその人物のそれまでの人生の一冊のアルバムが構成された。本作においても17-20歳の各年齢の過去の自分にまつわる写真4枚が描写されている⁹。だがトラウマの体験が起こった58年夏とその体験の余波に苦悩する翌年の少女の姿の実際の記録はなく、写真はむしろ体験の前とその2年後の少女の急激な身体的変化を強調する。本項では、語り手／各年齢の過去の自分（少女）、少女／58年夏の記憶の双方の関係性に焦点を当て、その変化を分析していく。

(1) 語り手は、バカロレア試験用証明写真に写った「優しく怠惰な印象を放つひどい髪型」の17歳の自分を見つめ、「この少女はわたしか。わたしは彼女なのか。」(MF 20)と自問する。当時の生活状況、思想、夢、個人的な些事、社会的ニュース等を列挙した挙句、「写真の少女はわたしではないが、彼女は虚構ではない」(MF 20)、「50年代の世界を思い描くのに、彼女以外の記憶はわたしにはない」が「記憶をわたしにくれたよそ者である」(MF 21)と、過去の自分の実在性を写真によって裏付け、記憶保持者として認めるものの、自己同定を拒む。語り手とこの少女を隔てているのは何だろうか。それは58年夏の記憶で、その記憶の不在が、写真の少女と語り手を含めた58年夏以降の少女の間に決定的な亀裂を生んでいる。これは『恥』においてピアリッツで撮影された写真の12歳の少女と語り手が、父の暴力の光景を目撃した記憶によって絆を得たのと対照的といえる(p.142)。

また、彼女は記憶の中で「背が高く頑丈な体つきで、真面目そうな中流階級の

地方出身者」(MF 23)の、彼女自身の体を持つ (J'ai mon corps.)。つまり純潔を保っている。一方、語り手と58年夏以降の少女は58年夏の記憶という秘密を持ち、「男性の体の刻印¹⁰」がある体を共有する。則ち、17歳の少女は秘密の記憶と身体という両面において、語り手とは異なる存在として位置付けられている。

(2) 58年12月の農業学校のダンスパーティの写真は、語り手にとって「『これはわたしである』とも、『わたしだった』とも認めるのが耐えられなかった」(MF 95)という理由で、過去に破って葬られたため、本来存在しないはずのものである。(友人の写真を数年前に複製した。)友人たちの隣にいる、体験から3か月経過した少女は「ずんぐりした体つきで、25歳か30歳に見え、S町の喜びに満ちた顔をしている」(MF 95)。顔からは夏の体験の痕跡が幸福の印として露呈しているが、それと同時に彼女の風貌は現実の時間の外にあり、不吉な前兆を示すものとして捉えられている。

(3) 59年6月の修道院の寮の部屋の写真 (MF 80-81) にもうじき19歳になる「エルヌモンの少女」の姿はない。だが写真を通して感覚的に見出される「59年夏と60年秋」の少女に、語り手は決してなりたくない、想像することさえ恐ろしいと思っている (MF 83)。少女は貞淑で裕福な家庭のクラスメイトたちに囲まれ、女性に課せられた暗黙の性道徳を察知し、性的なことと自分の出自について沈黙する。彼女は前年夏の自分を「もうひとりの少女で、わたしではない」(MF 99)と認識しているが、それらの秘密は身体的症状という形で表出している¹¹。無月経により「毎月定期的に血を失う少女たちの共同体」(MF 90)から除外され、断食と過食の制御不能な食への欲望に支配されている (MF 102)。さらに、無感情 (MF 114) と冷淡さ (「内的氷河期」(une glaciation intérieure))、突発的な攻撃的感情と欲情の発露 (MF 107-108)、盗みへの衝動的欲望 (MF 116) によって、不安定で危うい精神状態にある。

(4) 60年の写真で、「ロンドンの少女」はプールサイドでピンナップ写真の女性のようにビキニ姿でポーズを取っている。以前とはかけ離れた姿だが、語り手は「より大型サイズの林間学校のブロンド娘」(MF 141) と形容して秘密の記憶と結びつける。当時少年たちが羨望し、彼女も憧れたあのブロンド娘 (MF 55)、

「現在のわたしではないわたし」(Elle est, moi je ne suis pas.) (MF 56) と後に日記に書き留められた少女の姿に、体験から2年後彼女は自ら変身したのだった。『第2の性』を読み「少女の恥」を自覚した彼女が、過去の記憶を肌の下に封印し (MF 142)、まるで別の少女の記憶に上書きしようとしているかのようである。彼女は友人Rの存在に助けられ、別の恥の秘密を更新し、観念的な意味で「本物の少女」に再び戻ったと認識している (MF 142, 147)。

その後、62年に文学部の優秀な学生という新しいアイデンティティを獲得した彼女は、林間学校を再訪する。

結局、わたしが戻って来たのは、58年の場所に「見覚えがある」からではなく、17世紀の巨大な建物の灰色の壁に、ファサードの最上部で屋根の下にあるわたしの部屋の小窓に向かって、わたしはもう58年の少女と全く関係ないと言ってやるためなのだ。(MF 149)

体験した場所の再訪はこれ以降も続くエルノーの執筆前の儀式であるが、ここで注目したいのは、58年夏の少女が林間学校の建物の内部にいるかのような彼女の振る舞いである。このように記憶は外部へ転移され、さらに翌年元夫との出会いによって「わたしの生物学的処女性性の証明は疑いの余地のないもの」(MF 150)と捉えられる。つまり、局所的な意味で性的行為の事実そのものが否認されるのである。

しかし、少女の意に反して過去の事実が消滅することはない。映画や小説の架空の登場人物を媒介するとき、記憶は唐突に強度を増して蘇る。

前年の欲望と苦悩の中で一体何が残っているだろう。エマニュエル・リヴァと日本人の結ばれた身体を見ると、呼吸が止まる。クリスチアーヌ・ロッシュエフォールの小説『戦士の休息』を読むと、激しく動揺して半ば吐き気がする。まるでその従順な登場人物は自分のよう。(MF 120)

性的欲望と男性への隷属という過去の記憶が目覚め、59年の少女の体に、強烈な身体的苦痛と嫌悪が引き起こされている。

毎回まるでわたしは画面上の少女に拉致されたかのよう。わたしは彼女、今の私である女性ではない、58年夏の少女になったかのよう。わたしに浸透し、呼吸を止め、簡潔にいうと、もはや存在していないという印象を与えているのは彼女なのだ。

50年の隔たりを超えて生じ内面の崩壊を引き起こしうる、1958年のその少女は、つまり、わたしの心の中にある、還元できない隠された存在である。辞書の定義通り、現実というのが、作用し効果を生み出すものだとするれば、その少女はわたしではないが、彼女はわたしの中にある現実である。「実在」のようなもの。(MF 21-22)

語り手は、別の小説や映画によって現実世界から引き剥がされ、現実と虚構、自他の境界を失くし、自己が崩壊するほどの危機的状況に陥っているが、物理的な物が聖変化してキリストそのものになるという「実在」¹²という用語を用いて、この少女に聖性を付与している。『事件』においてエルノーは、大学寮で「出産」し病院で手術を受けた一夜のことを、「聖なるもののような私の体の中の秘密」と表現し、「わたし」は他の人間が決して到達しえないことを成し遂げた「誇らしさ」を感じていた (p.184)。58年夏の秘密は、それ以降の人生において彼女を苦しめ続けてきたものであるが、少女が欲望と狂気に満ちた体験を生き抜いたことは、語り手にとって栄誉であり、それが放つ威力は崇高で永遠のものである。このように、今や語り手にとって58年夏の少女は、自己とは異なる聖なる存在であり、文学によってのみ近づくことが可能になるのである。

自己と人称

これらの条件下で、わたしは「わたし」(je) に58年の少女と2014年の女性を融合すべきか。あるいは、最も的確—主観的評価—というのでないが、最も大胆と思われるのは、「彼女」と「わたし」を使用して、前者と後者を切り離し、現実と行為を最大限説明すること。最大限容赦なく、ドアの向こうで人が自分のことについて、「彼女」「彼」と呼び話しているのを耳にして、その時自分が死んでいるように感じる人々のやり方で。(MF 22)

一般的な自伝と同じように、『事件』『恥』においてもエルノーは過去の自分に一人称を使用してきた。しかし、前項で論じた内容を踏まえると、語り手は58年夏の少女を非自己とみなしているため、三人称の使用はさほど唐突にも不自然にも思われない。加えて、エルノーが自己に対して三人称を用いるのは初めてではない。ただし『歲月』の「彼女」が写真上の自分を指し示すもので、現実に即した言表だったのに対し、写真が不在で、記憶にのみ存在する自己に対する本作での使用は虚構性を強めかねないため、語り手が熟慮するのも当然だろう。事実、テキスト上で58年夏の「彼女」は、酩酊した彼女自身が「自分は何になったのか」と自問しているように（MF 59）一貫したイメージを保持していない。当時周囲にいた人々の嘲笑的で侮辱的な表現やレッテル（「ちょっとアバズレ」等）、友人の仕草（「完全にイカれてる」）、そして彼らが名前と外見の類似性から挙げた有名歌手（ジュリエット・グレコ、アニー・コルディ）が「彼女」のイメージを形成する。また、少女の初夜の光景では、途中で突如ボルノ映画の一場面に切り替わり、「彼女」のイメージは一瞬で男性の「相手役/セックスパートナー」（la partenaire de l'homme）に変化したり（MF 44）、映画『ワンダ』の女優の姿が、集団いじめの標的にされた「彼女」に変身したりする（MF 52-53）。そして本作終盤では、95年に語り手が遭遇したソウルの裏通りで客を待つ売春婦の少女たちのイメージが重ねられる（MF 147）。

また、時間の経過と地理的、社会的移動によって、少女のアイデンティティは度々変更される。語り手は年数と季節、建物、地名、身分といった外的特徴と関連付けて「～の少女」と呼称し、名前の多様な表記（アニー・D、カリ、Any等）によって異なる性質を示す。このように「彼女」は付与されるイメージ、呼称によって様々な人格を規定される、多面的で変動的な捉え難い存在といえるだろう。

さらに、本書刊行時に行われたインタビューは三人称の使用について別の視点を与えてくれる¹³。エルノーは人称の併用を決定するのに時間を要したと前置きした上で、執筆開始から間もなくして、林間学校に参加するために目的駅のプラットホームに降り立った少女の姿に、彼女の母親がもつ「熱と振る舞い」の強烈な内的イメージがあったと語っている。本作で母親は娘の身体を管理し（MF 29）、性的なことを綴った日記を焼き払う（MF 61）といった、娘に憎まれるのも致し方ない厳格な側面が強調されている。しかし「母親の目から解き放たれて身軽」な環境下で実行された性的体験において、少女の抱いた激しい欲望と性愛

における振舞いに、母親との共通性を見出すのは意外にも難しくないだろう¹⁴。

一方、Jablonkaは人称の実験的な試みについて、これまでに発表された作品群の延長上に位置付けられるものであると指摘している。

『ナイフのようなエクリチュール』でエルノーが詳細に説明しているように、『場所』以降の第2期テキスト群は「自己－社会－伝記」の企てに属している。『歳月』では、世代の枠内にある生を語るため、彼女は、「わたし」の羞恥心のなさを、「彼女」の距離、「人々」の節度、「私たち」の推進力に置き換える。『少女の記憶』においても同様の判断で、「わたし」（2014年の作者）と「彼女」（1958年の少女）を切り離すことによって、彼女の行為をより自由に説明するのを可能にしている。Annieという名は「Any」と書き換えられるが、英語では、誰でも、何でもを意味する。証言者は、人々がその証言を我が物にしうるように、背後に控える。ある存在が、「他の人々の頭と生の中に完全に融合された」ような一般性となって現れるのである¹⁵。

エルノーの声が他の人々の声に変換される超個人的な自己観¹⁶は、Havercrofによると、『歳月』では個人、集団、社会が歴史の中で絶え間なく「実体変化」していくものとして表現されているが、エルノーの女性的主観としての「わたし」を、他の女性たちが貫通するとき、より明白に表れるとして「発話的腹話術」と表現している¹⁷。58年少女の身体は「不安と欲望の間で、初体験は今夏かしらと思いながら、カバンに使い捨て紙ナプキンの箱を詰めた」体験を持つ、あらゆる世代の女性たち、読者たちの肉体に変化し、受容されうるもの／受容されているものといえる¹⁸。

語り手と58年夏の少女の融合

さて語り手は最終的に58年夏の少女を自分であると認識するに至る。本項ではその過程と言表を確認していこう。

わたしが、わたしだったアニー・Dを、オルヌ県S町の駅前の小道に再び配置してから、夏、秋、冬が過ぎた。その全期間、わたしは58年の夏の時間の

境界を前後へ越えることを自分に禁じ、未来のない没入感のようなものを感じながらそこに居続けようとして、林間学校の空間に引きこもった。その結果、わたしはとてもゆっくりと書き進め、40週間、正確には273日間、林間学校のあの6週間を拡張させた。ごく近くでその日々を観察し、書くことによって現実存在させるため。約100頁を2時間で読むときに、青春時代の夏の際限のなさを感じさせるためだった。(下線引用者)(MF 77)

本作執筆の間中、語り手は、実生活の時間(推定9か月)を想像上の時間と空間に捧げていると認識している。このような禁欲的で現実離れした行為が、語り手の意識を50年代当時の世界へと沈潜させ、再体験の実感さえ生む。過去の自分になって記憶の世界を再び生き、自分の行動を観察することで、当時の自分に理解できなかった、性愛に関する「男性の野蛮さにかかわる」「普遍の法」の正体を発見する(MF 45)。それは本作のテーマとして、非個人的かつ一般的な形式(自他の主従関係)で冒頭部に提示されており、『事件』『恥』とも異なる過去へのアプローチを採る本作の特異性を印象付けている。

引用の下線文が示しているような、語り手による過去の自分の明確な同定は、語られる時間の少女の体験、つまり記憶の心像の描写の中ではなく、語り手が様々な分析や執筆に関して述べる、語る時間のパラグラフの中に限られている¹⁹。社会、歴史、文化的に詳細に言語化された明晰なテキスト世界に58年夏の少女を蘇らせる執筆行為の中で、「わたし」と「彼女」の往来を繰り返すことによって、語り手は過去と執筆の現在の溝/隔たりを超えて、ようやく過去の自分に接近し、自己と同一の存在として認めることができるのである。

語り手は、現在の自己の内面に、記憶の少女と共通するものを見出している。

毎日机上でかつてわたしだったその少女に再び会う、彼女と一体になるという狂気。彼女の亡霊、失われた彼女の存在に住みついているのはわたしだ。(MF 94)

執筆による文学的探究への狂氣的な執念は、58年夏の少女が抱いた男性への情熱と類縁にあたるものとして捉えられている。そして、執筆行為においては語り手が少女の身体を支配する側へと立場を逆転させている。

声とまなざし

本書全体の半ばを過ぎたところで、58年夏の記述は終わりを迎える。

今度こそ——2015年4月28日——わたしはきっぱりと林間学校を去る。執筆によって再びそこへ入り、何カ月も居続けない限り、わたしがそこから去ることはなかった。裸で震えて横になり、即座に男性器で口を塞がれたベッドから立ち上がることはなかった。彼に対してわたしは翌日から激しい愛を抱いた。2001年にこう書くほど。「S町の部屋とカルディネ通りの中絶女の部屋の間には絶対的な連続性が存在する。わたしは一方の部屋からもう一方の部屋へ移動し、両者の間にあるものは消えた」。

わたしは58年の少女を救出したようだ。沢山の子供たちが「我々は夏の子供たちの一団」と歌っていた、オルヌ沿いの荘厳で小さな古い建物に、50年以上前から彼女を囚人として留置した呪いを解いたようだ。わたしは言える。彼女はわたし、わたしは彼女。(下線引用者) (MF 78-79)

語り手にとって執筆の完了は、彼女が没入した58年の夏の世界から外へ出ることを意味している。少女の「愛の一夜」は、出会いの場であるダンスパーティから、少女が男性と同じベッドで眠りつくまで、青年たちの行動、少女の体温や気持ち、室内の様子、そこにある様々な物等が、数頁にわたり事細かに三人称で説明されているのだが、ここでは下線の引用文が示すように、一人称の「わたし」の視点で捉え直され、一文(原文)に集約されている。これは語り手が少女の体験を我が物としたことを意味している。「少女の恥」という呪いによって幽閉された林間学校から、「処女喪失」「激しい愛」というタブーを犯した罪人を解放するため、語り手は呪文を唱える。それは自己同一性という通常であれば至極ありふれた自己認識を表す言葉であるが、トラウマの秘密が語り手の発話にかくも長く険しい道程を強いたといえよう。エルノーにとって一人称は声を意味している²⁰。つまり58年夏の少女は「声」を取り戻した²¹。語り手は声が特別な力を持ち、「神秘的な幻影」を引き起こしうるものと考えている (MF 75)。したがって、エルノーはテキスト上の「わたし／彼女」の「声」が読者の眼前に時空を超えて過去を再現させることを期待しているともいえるだろう。

「彼女はわたし、わたしは彼女」という文言は、先述した17歳の証明写真の少女のまなざしに呼応している。「(「じっと写真の少女を見るほどに、彼女がわたしを見ているように思われる。この少女はわたしか。わたしは彼女なのか。」(MF 20)) 語り手は過去の自分を見るだけでなく、過去の自分に見られる存在でもある。執筆を通して、語り手は、記憶の少女が体験した世界と彼女を一部として構成された当時の社会の両方を理解した。則ち、過去の少女を主体とするまなざしを獲得したのである²²。

本作後半において、語り手は外部から執筆する現在の自分の姿へまなざしを向けている。

時々わたしは原稿から顔を上げ、周りのすべてに無関心な内面へと向かうまなざしから離れる。わたしは自分を見つめる。まるで誰かが外部から、視界を遮るもみの木が脇に植えられた、張り出した壁の細い路地から、自分を観察しているかのよう。大きなランプに照らされた、窓辺の小さな机に座っている。よく喜ばれる陳腐なイメージ(新聞やテレビでわたしはこのようなポーズをとるよう頻繁に注文を受けた)。(MF 88)

観察によって得られたこの作家然とした自己像は、58年夏の少女の夢には存在しないが、59年の少女の意識の中に確実に存在している、彼女たちの未来の姿を表している。しかし、それはメディアが求めるペンネーム「アニー・エルノー」の人工的なイメージであり、アニー・デュシェーヌ本人の本来の姿とは異なることを、冷淡な語り口が暗示している。

以上、『少女の記憶』を通して、トラウマを語ることと秘密を抱えて生きることの困難を明らかにし、過去の自分との和解がテキスト上でどのように表現されているのかを論じてきた。

58年夏の自由で幸福な体験は、その後彼女が出会った人々や思想(本)によってトラウマ的恥の記憶へ変質し、秘匿されていった。その過程は社会的移動と重なることで彼女の人格形成に大きな歪みを生じさせるが、結果として彼女を執筆へと向かわせる契機となった。エルノーはラジオインタビューの中で58年の少女の傲慢さが処女小説の出版を可能にしたと語っている²³。彼女がいなければ

作家エルノーが誕生することはなかったということである。

本稿では58年夏の少女と語り手の関係性を中心に、本作前半の人称の使用とテキスト分析を採り上げたが、58年秋以降の少女と語り手の関係性と人称の使い分けは前者と同じではないということを付け加えておきたい。

注

1. Annie Ernaux, *Mémoire de fille*, Paris, Gallimard, 2016 (以下MFと略す。)エルノーの他作品は *La honte*, Gallimard, coll. « Folio », 1997, *L'événement*, Gallimard, 2000 [邦訳:『事件』菊地よしみ訳、早川書房、2004年], *Les armoires vides*, Gallimard, 1974, *Ce qu'ils disent ou rien*, Gallimard, 1977, *La place*, Gallimard, 1983 [邦訳:『場所』堀茂樹訳、早川書房、1993年], *Une femme*, Gallimard, 1983 [邦訳:『ある女』堀茂樹訳、早川書房、1993年], *Les années*, Gallimard, 2008
2. Annie Ernaux, « Sur l'Événement », dans Pierre-Louis Fort (dir.), *Cahier de l'Herne Annie Ernaux*, Paris, Édition de L'Herne, coll. Cahiers de L'Herne n° 138, 2022, pp.98-100
3. MF 43、2012年1月7日の創作日記の中で当時の性的事件（ボランスキー、DSK）に言及し、怒りを表している。(Annie Ernaux, « Écrire (IV) », *Ibid.*, p.235)
4. Gisèle Sapiro, « Une ethnographie de la violence symbolique », *Ibid.*, pp.244-247
5. この項ではScharffの『事件』の時間と自己の分析に照らし合わせて本作を考察している。Adrien Scharff, *Le temps et le moi dans l'œuvre d'Annie Ernaux*, Paris, Le Manuscrit, 2008, pp.89-95
6. 「この男との二晩がわたしの人生に及ぼした影響力と、彼の人生にわたしの存在が皆無であることの信じられない不均衡。わたしは彼が羨ましいとは思わない。執筆しているのはわたしなのだ。」(MF 94)
7. Annie Ernaux, *Écriture comme un couteau: entretien avec Frédéric-Yves Jeannet*, Paris, Stock, 2003, pp.62-63. Philippe Vilain, « Annie Ernaux: l'écriture du "don reversé" », *LittéRéalité*, 10(2), 1998, pp.61-72
8. Barbara Havercroft, « Je ne suis pas le plombier! : Annie Ernaux et le féminisme », dans *Cahier de l'Herne Annie Ernaux*, *op. cit.*, pp.78-82
9. 少女アニーの描写を目的とした写真以外に、Hの婚約者、友人Rの写真もある。
10. MF 87、この思春期の身体は『事件』において母の身体と対比されている。「あの夜のあいだに、思春期から持っていた体とともに、ひそやかに息づいていた性器を失ってしまったのだと悟った。男の性器を吸収してもそれで変わることなく、ますますひそやかに息づくことになった性器を。わたしは性器を晒し、引き裂かれ、お腹のなかを搔き削られ、外部に向かって開かれてしまっていた。わた

しの母の体と同じように。」(『事件』、前掲書、p.174) エルノーは自己と世界との関係を身体を通して認識している。

11. Caroline Lebrun, Chapitre 4. L'adolescence abusée, raconter l'impossible (B. Abdessadok, P. Assoun, G. Bonnet, C. Lebrun et M. Patti, *La séduction : Pour le meilleur et pour le pire*, Paris, In Press. *Psy pour tous*, 2022, pp.67-86) を参照。セルジュ・ティスロン『家族の秘密』、白水社文庫クセジュ、2016年は秘密の世代を超えた影響について詳しい。
12. (la) présence réelle. (英: Real Presence) 「キリストの現在 (または実在)」 「聖餐のパンとぶどう酒とに、キリストのからだと血とが実在することを意味する。」『キリスト教大事典 改訂新版』教文館、2000年を参照。
13. Sophie Joubert. (2016, avril 8). «À 18 ans, j'avais une confiance intrépide dans l'avenir» *L'Humanité, Tribune Idées*, vol.16 を参照。
14. 他作品で母は性愛に対して強い恥じらいを持ち、そのことについて娘に対し沈黙したと述べられたが、*Se perdre* (Gallimard folio, 2001) では、母の父以外の男性との関係に関する記述がある。: «J'ai appris hier de mes parents que ma mère avait rencontré un monsieur «bien» à Annecy, qu'elle avait hésité à se remarier. (...) Cela me trouble et me plaît. Je suis la fille de cette femme de désir, mais qui n'osait pas aller jusqu'au bout. » (p.51) 作者の恋愛における行動と母の熱心な仕事への態度とが並列されている。: «Je songe à la fébrilité de ma mère, à son désir de travail continu, à mon propre besoin de faire, mais rien que des choses utiles, et surtout utiles au monde. Écriture politique, action sociale, d'où me vient cette volonté d'engagement (et même dans l'amour, je m'engage à mort), de nécessité de la *praxis*, de donner aux autres.» (p.229) 両者の男性への隷属性に関する記述。: «Il se sert du whisky (...) pendant je suis à la cuisine. Ma mère faisait cela. La mentalité d'esclave (en moi aussi).» (p.115)
15. Ivan Jablonka, «Je, elle, nous», dans *Cahier de l'Herne Annie Ernaux*, op. cit., p.250
16. Annie Ernaux «Vers un je transpersonnel»: «Le je que j'utilise me semble une forme impersonnelle, à peine sexuée, quelquefois même plus une parole de «l'autre» qu'une parole de «moi»: une forme transpersonnelle, en somme.» dans Serge Doubrovsky, Jacques Lecarme et Philippe Lejeune (dir.), *Autofictions & Cie*, Université de Paris-X, 1994, pp.219-222; <<https://www.annie-ernaux.org/fr/textes/vers-un-je-transpersonnel/>>(page consultée le 26/04/2025)
17. Havercrof, art. cit., p.81
18. Isabelle Charpentier, «Lectures de *Mémoire de fille*», dans *Cahier de l'Herne Annie Ernaux*, op.cit., pp.223-227
19. «mon être d'à peine dix-huit ans»(MF 46), «la fille qui a été moi»(51), «la blonde pouvait avoir voulu prendre une place que j'avais occupée par hasard»(55), «j'étais sublime d'intrépidité...»(57), «mon «inconduite»»(62), «mon dentifrice»(63), «ce sacre de ma folie»(70), «H est devenu mon premier amant»(71), «je pensais que durant trois minutes je

redevenais réellement la fille de S.》(74) (執筆時に語り手が記憶をもとに思い描く絵画的イメージからも「わたし」は排除されている。《Il n'y a pas de moi dans le tableau, il n'y a que des autres, imprimés sur elle, Annie D》(68))

20. Annie Ernaux, *Écriture comme un couteau*, op. cit., p.30
21. 「わたしには彼女が見えるが、彼女の声は聞こえない。」(MF 24)
22. ジャン＝ポール・サルトル『存在と無Ⅲ：現象学的存在論の試み』、松波信三郎訳、ちくま学芸文庫、2008年、第三部対他存在 第一章他者の存在 IV まなざしを参照。
23. Ernaux, Annie. 2016. Entrevue radiophonique avec Kathleen Evin. *L'humeur vagabonde*. Diffusée le 4 avril. Paris : France Inter. をポッドキャストにより聴取。